

第三期中期計画研究プロジェクトの中間評価結果概要

I. 第三期中期計画研究プロジェクトの中間評価について	P. 2
II. 学識経験者による第三期中期計画研究プロジェクトの 中間評価結果概要	P. 3
III. 中間評価結果を受けての対応	P. 11

I. 第三期中期計画研究プロジェクトの中間評価について

「国の研究開発評価に関する大綱的指針」（平成24年12月6日 内閣総理大臣決定）が改定され、これに基づいて「文部科学省における研究及び開発に関する評価指針」の改定案が平成25年12月から平成26年1月にかけてパブリックコメントに付された。独立行政法人 物質・材料研究機構(NIMS)においては、平成24年4月11日付けで「独立行政法人物質・材料研究機構における研究開発課題評価実施要領」（以下、課題評価実施要領と呼ぶ）の改訂を行った。

第4期科学技術基本計画（平成23年8月19日 閣議決定）では、「II. 将来にわたる持続的な成長と社会の発展の実現」に「2. 震災からの復興、再生の実現」と並んで、「3. グリーンイノベーションの推進」「4. ライフイノベーションの推進」が挙げられており、環境・エネルギー技術、医療等の一層の革新を促すと述べられている。また、「IV. 基礎研究及び人材育成の強化」では、長期的視野に立った基礎研究の推進を一層強化していく必要があるとしている。

NIMS では、第4期科学技術基本計画の策定経緯を注視しつつ、第三期中期計画期間（平成23年度～27年度）において、物質・材料科学技術に関する基礎研究及び基盤的研究開発の成果を、環境・エネルギー・資源問題の解決、産業競争力強化等の社会的課題への対応に向けて還元していくことを目標とした。これに基づき、運営費交付金によって取り組むべき重点研究開発領域を、「新物質・新材料の創製に向けたブレークスルーを目指す横断的先端研究開発の推進」と「社会的ニーズに応える材料の高度化のための研究開発の推進」の二つとした。前者においては、「先端的共通技術領域」（5プロジェクト）と「ナノスケール材料領域」（4プロジェクト）を、後者においては「環境・エネルギー・資源材料領域」（10プロジェクト）を設定し、合計19プロジェクトを平成23年度から開始することとした。その後、平成23年3月11日に起こった東日本大震災に伴う大きな情勢変化を踏まえ、NIMS では第三期中期目標及び中期計画の見直しが行われ、平成23年度から開始した19プロジェクトに加え、平成24年度から新たに1プロジェクト（「社会インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」）が開始された。

NIMS の課題評価実施要領では、「中間評価は、5年以上の研究期間を有する研究開発課題について、研究開発の進捗状況の把握、研究責任者による自己点検・評価を踏まえた明確な目標の達成度の確認、研究開発の目的・目標等の見直し、計画外事象の発生の有無とその対応の適否、研究開発の進め方の見直し（継続、変更、中止等の決定）、研究開発の質の向上、研究資金・人材等の研究資源の再配分の決定、研究者の意欲喚起等を目的とし、原則3年ごとを目安として行う。研究期間が5年未満の研究開発課題は、中間評価を行わない。」と述べられている。

課題評価実施要領に基づき、第三期中期計画で実施されている20プロジェクトのうち、研究予定期間が5年の19研究プロジェクト（平成24年度開始の4年計画プロジェクト「社会インフラの復旧、再生に向けた構造材料技術の開発」を除く）について、研究開始から3年目の平成25年12月から平成26年2月にかけて中間評価を実施した。

以下、学問的視点からの学識経験者による第三期中期計画研究プロジェクトの中間評価結果の概要について述べる。

Ⅱ. 学識経験者による第三期中期計画研究プロジェクトの 中間評価結果概要

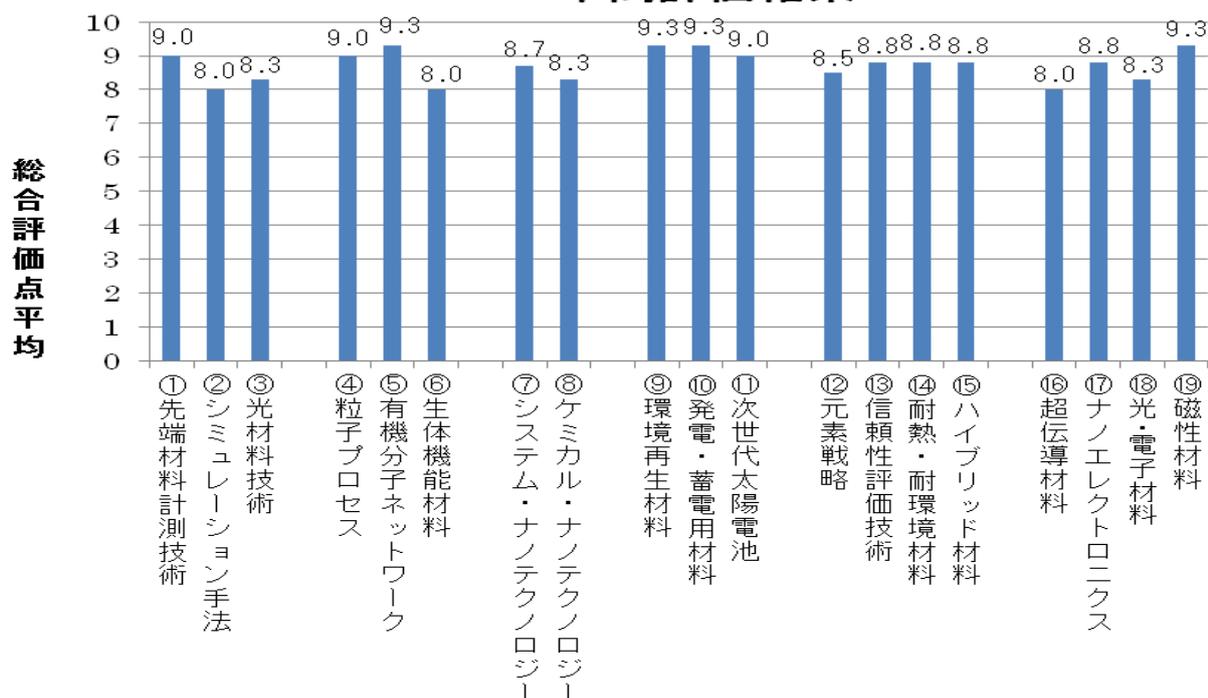
1. 評価方法

学識経験者による19プロジェクトの中間評価を、研究開始3年目の平成25年12月から平成26年2月にかけて、学問的視点から実施した（「第三期中期計画研究プロジェクトの中間評価委員会（学識経験者、スケジュールと構成）」参照）。中間評価は、評価委員やプロジェクト責任者の負担を軽減するため、研究領域を考慮し比較的類似した2～4プロジェクトを6グループ化（主に先端的共通技術領域の1と2、ナノスケール材料領域、主に環境・エネルギー・資源材料領域の1、2、3）して行った。評価委員は課題評価実施要領に基づき、グループ毎に3～4名の利害関係のない当該分野の学識経験者に依頼し、グループの評価委員のうち少なくとも一人はNIMSの以前のプロジェクト評価作業に携わった経験のある専門家とした。中間評価に携わった評価委員は合計20名（所属内訳：大学関係16名、公的研究機関関係3名、民間会社・研究所関係1名）であった。評価資料は遅くとも評価委員会の一週間前には評価委員に送付して、要点の把握、質問事項の整理などをお願いし、ピアレビュー評価委員会を効率的に開催した。評価委員会会場は、評価委員に便利な東京一ツ橋の学術総合センター共用会議室を主に利用した。ピアレビューによる中間評価委員会には、研究担当理事、企画部門長兼戦略室長、企画部門評価室長も出席した。評価委員会では、プロジェクト責任者による説明、評価委員とプロジェクト責任者の質疑応答、評価委員による評価票の記入が行われた。中間評価票の評価項目は、①研究計画、実施体制、マネジメント、連携、②研究開発の進捗状況及び進め方、③論文・特許等の直接の成果（アウトプット）、効果・効用（アウトカム）、波及効果（インパクト）、④総合評価、及び総合評価点である。取りまとめられた評価結果は、評価委員による修正・了承を経た後、中間評価報告書（評価委員会案）として、課題評価実施要領に基づきプロジェクト責任者に開示された。評価結果に事実誤認の十分な根拠のある場合は、プロジェクト責任者は1回に限り事務局を通して文書で申し立てることができ、評価委員に申し立て個所の再検討を依頼した。この手続きを経て中間評価報告書は確定した。10点満点法による各評価委員の総合評価点は平均され、小数第二位以下が出た場合は四捨五入した。

2. 19プロジェクトの中間評価結果

19プロジェクトの中間評価結果の総合評価点平均値を次ページの図に示す。評価委員からの総合評価点平均は、いずれのグループのプロジェクトも8.0点を超えていた。なお、評価委員には1点から10点までの評価基準を事前に提示しておいた。ちなみに、8点は「総合的に優れている」、9点は「計画を変更することなく継続すべきである」、10点は「全ての点において模範的に優れている」と評価基準を評価委員に示した上で、総合評価点は記入されたものである。

中間評価結果



以下に、第三期中期計画研究プロジェクトに対する、中間評価委員からの主なコメントを記す。

「①先端材料計測技術の開発と応用」：

- ・表面から内部にわたる構造と物性を多くの手法でバランスよく研究していることは見事である。各技術分野の高度化とともにそれらのシナジー効果を狙うような共通テーマを掲げたプロジェクトを実施している。
- ・東日本大震災による被災が計画に大きく影響したサブテーマもありながら、全体としては極めて良好な進捗と言える。当初目標に照らした達成度、計画以上に進んだ項目、被災による遅れなど、適切に評価できており、今後必要な計画変更も適切と言える。
- ・総合評価として、世界最高水準の先端材料計測技術を実現しており、当分野における NIMS の技術的な優位性を実現していると言え、非常に高く評価できる。今後とも NIMS 内外、国内外の研究機関と協調して当分野の発展に寄与することを望みたい。
- ・期間前半の成果については主にサブテーマごとに報告がなされ、それぞれの特徴がアピールされたが、期間後半にはより総合力とリーダーのマネジメント力を活かした、単にグループの寄り集まりでは達成できない成果が、目に見える形でアピールされることが期待される。

「②新物質設計シミュレーション手法の研究開発」：

- ・本プロジェクトは新物質設計に関して第一原理計算手法から古典統計熱力学手法まで、マルチスケールな材料設計シミュレーション技術の開発を研究対象としている。シミュレーションの対象は多岐にわたっているが、サブテーマの設定も適切に行い、テーマ管理も合理的である。
- ・期間前半において手法的には特色のある成果の蓄積が行われてきたので、期間後半では個々の技術の高度化だけでなく、実験研究を巻き込んだ総合力発露の分かりやすいアピールがあれば素晴らしい成果になると期待される。特にトポロジカル絶縁体に関連する理論予測については早期の

実験検証の働きかけを期待したい。

- ・計算がこれからの材料研究やデバイス開発に非常に重要であることはもはや議論の余地はなく、国内国外の多くの先進的研究機関は必ず計算グループを持っている時代である。そのため、「NIMSの計算グループの強み」を計画の中に鮮明に打ち出し、他機関との違いを素人にも分かるように示すことが戦略上有効なのではないかと思う。

「③革新的光材料技術の開発と応用」：

- ・学術的にも技術的にも意義深いアウトプットが順調に出ており、良好な成果と言える。特にコロイド結晶の各種応用、もつれ合い光子源の開発等で、ユニーク、かつ競争力のある成果が目立つ。
- ・チームが持つ個別技術や強みをうまく組み合わせ、グループの再配置などに気を配っており、進捗に応じた工夫が見られる。
- ・総合評価として、世界水準の光材料開発技術を実現しており、当分野における NIMS の技術的な優位性を実現していると言える。この点でも高く評価できる。
- ・各グループともにデバイス指向の開発であるが、どこへ到達すれば目標達成となるのかが分かりやすくなるよう、光技術の将来ビジョンの中での位置づけなどをもっと明確にできれば一層期待が持てる。

「④新材料創出を可能にする粒子プロセスの開発と応用」：

- ・独自に開発した多くの基盤技術をもとに、粒子作製、構造体化、設計、評価まで一貫した研究体制は世界に類をみない研究体制であることとそれを生かし、多くの NIMS 発の新規材料が生まれているのは高く評価し得る。
- ・高いレベルの材料のナノ構造と物性に対する理解を基盤として新しい材料がいくつか開発されており、今後の展開も期待できる。
- ・掲載論文数も多く、また特許の登録数や実施許諾数も数多くなされていることは特筆に値する。
- ・他分野等への波及効果の点で若干物足りなさを感じる。今後はアウトプットからアウトカムへ視点を移して自己点検・評価する姿勢が求められる。
- ・目標達成の評価基準をよりクリアに厳しく設定して、研究促進に役立ててほしい。

「⑤有機分子ネットワークによる材料創製技術」：

- ・有機分子ネットワークというキーワードで膜材料、電子材料、光機能性材料などの開発が行われている。方向性としては、応用・実用化を意識したものであり、機能材料の展開としては意義ある方向にあると考えられる。
- ・研究の進捗状況も客観的、的確に把握し、世界的にも競争の激しいマテリアルサイエンスの国内外での他の研究の現状と当該研究の優位性も検討しており、今後の研究展開、研究連携を図る姿勢は、高く評価される。
- ・特に新規分離機能材料や表示デバイスの成果は、学術的にも国際的に高く評価されており、さらに実用化に向けての取り組みも含め、特筆に値する。
- ・ユニット長のリーダーシップで、3つのサブテーマにおいて当初計画以上の成果が挙げられている。このまま期間後半の研究を深化させても良いが、さらにサブテーマ間の連携を再編して新たなターゲットを設定して展開していくことを期待する。

「⑥ナノバイオテクノロジーによる革新的生体機能材料の創出」：

- ・生体機能材料・医療材料に対して、本プロジェクトが掲げる大きなスローガンに関しては、まだ達成が見えない状況であるが、研究は着実に進展していると考えられ、今後に期待したい。
- ・実用化を目指すバイオマテリアルの現状は十分に把握され、本研究チームの自己点検・評価も客観的に行われ、それを踏まえた研究戦略、展開がなされつつある。
- ・マテリアルセラピーは興味ある、そして意義あるバイオマテリアル設計概念であるので、その成果を世界に広く発信し、この分野での優位性を実証してほしい。
- ・全体としてはまとまっているように見えるが、もう少しサブテーマ間の連携を見直して、融合領域へ踏み込む視点を持って新たな材料開発に取り組んでほしい。

「⑦システム・ナノテクノロジーによる材料の機能創出」：

- ・従来のナノテクノロジーを超えた「システム・ナノテクノロジー」に挑戦するという極めて野心的なプロジェクトであり、その大きな方向性に沿って、それぞれのサブグループが多様な戦略と得意技をもって研究を進め、しかも大変興味深い成果を挙げていることは高く評価できる。とくに、原子スイッチを応用して、学習機能のある神経回路網を模した回路を作ったという成果は特筆に値する。
- ・世界のナノテクノロジー・材料研究開発を先導し、かつ国際的水準を大きく満足する独創性の高い学術的成果が発信されており、アウトプットに関しては顕著で高く評価できる。
- ・本プロジェクトは非常に挑戦的・革新的な材料・デバイス・システム創製であるので、プロジェクト期間後半ではサブグループ間の連携をより密に相乗効果を発揮し、目的とするデバイス創製に繋がる成果創出を目指すことで、NIMS を代表するトップクラスの成果が生まれるものと十分期待できる。

「⑧ケミカル・ナノテクノロジーによる新材料・新機能の創出」：

- ・新機能物質探索・創製を基本の方向性に置き、ナノスケール物質の組成構造精密制御とその集積化による新材料・新機能創出を目的としており、我が国の他機関では成し得ない NIMS の強みを存分に生かしたプロジェクトであり、これまでの実績に基づく確かな計画と、各サブテーマを引っ張る研究陣とその実施体制も大変充実している。
- ・総合的には、それぞれのサブグループの得意技で世界最高水準の研究成果が出されており、高く評価できる。惜しむらくはサブグループ間の連携強化によるシナジー効果が見えないので、それが出るとさらにすばらしい。
- ・ロードマップの記述が一般的で具体性に欠けているのが残念である。研究開発も中間期を迎えた以上、ロードマップもより具体的なマイルストーンの記述や数値目標の導入も検討する必要がある。また、サブグループ間の連携も考慮したロードマップも検討の余地がある。
- ・プロジェクト期間後半では、機能化・材料化を一段と意識するとともに、より高品質のナノシート作製につながる基礎研究・基盤研究にも注力することにより極めて優れたプロジェクトとして展開するものと評価できる。

「⑨次世代環境再生材料の研究開発」：

- ・研究全体としては総合的・系統的に環境技術に応用できる機能性材料が精力的に研究・開発されており、研究成果も多数発信されているので高く評価できる。
- ・新材料開発で大きな成果が得られている。特に Ag_3PO_4 光触媒や、新規ニッケル系触媒など、世界的な成果が得られており、論文の被引用回数の多さから判断しても、注目すべき成果である。
- ・3.11（東日本大震災）以降に開始された放射性物質の吸着・除去・固定材料の開発は、国民的関心事であり、NIMS の貢献は高く評価できる。今後は、この分野の研究開発をいっそう加速させてほしい。
- ・次世代環境再生材料の開発という面で、多様な新規材料が提案され、世界的な成果が得られている。今後は、これらの学術的な成果をもとに、実用化に向けた課題の整理を行って欲しい。
- ・国内外との連携については、数多くの大学や研究機関と連携を取っているようであるが、全体の研究計画のなかでの役割分担、およびその成果について明確ではない。

「⑩高性能発電・蓄電用材料の研究開発」：

- ・サブテーマごとに数値目標を掲げて研究開発を実施しており、課題が明確になっている。
- ・研究全体としては総合的・系統的に実用化に向けた機能性材料、蓄電デバイスが精力的に研究・開発されており、研究成果も多数発信されているので高く評価できる。
- ・企業との連携、そして国際的な連携がうまくとれており、実用化に重点を置いた研究開発が進展されている。
- ・全体として、競争的資金を得て活発に研究開発が展開されているが、競争が激しい全固体リチウム電池や燃料電池の分野で、ヒューマンリソースが不足しているように思える。
- ・計画には記載されていないが、今後、開発した材料の耐久性についても評価すべきである。

「⑪次世代太陽電池の研究開発」：

- ・色素増感太陽電池について、5年ぶりに変換効率記録を更新し 11.6%まで向上できたことは高く評価できる。
- ・これまでの色素増感太陽電池に関する経験をもとに、優れた研究が実施されている。デバイス動作のメカニズム、損失過程、それを克服する手法の提案、新提案の有効性の実証など、いずれの面でも評価される。
- ・今後、色素増感太陽電池の変換効率を 15%まで向上させようとする、もう一段のブレークスルーが必要であり、次に打つ手が明確には見えない。
- ・研究成果は、権威ある欧文誌を含め多数の論文掲載（141篇）がなされており、国内外での学会発表も活発に行われていることから、十分な研究成果の発信も行われていると判断できる。
- ・世の中に突然出現したペロブスカイト太陽電池は、まだまだ安定性に問題があると言われているが、NIMS として、この材料系にどのように取り組むかの決断が必要である。

「⑫元素戦略に基づく先進材料技術の研究」：

- ・結晶制御技術を用いて構造材料の開発を行うことは、様々な特性のバランスを取り新たな材料を短時間に開発できる可能性のあるパワフルな技術であり、これを着実に推し進める研究として高く評価できる。
- ・構造・機能材料の組織形成、物性評価、メカニズムの検討、新規材料の実現、高機能達成など、

希少元素に頼らない材料科学・技術の基盤となる先端的成果を生み出している。

- ・プロジェクト全体としては、実に多くの論文発表やプレス発表をしている点は良い。また、多くの基本特許の出願も評価できる。
- ・構造材料では、研究目的において注目した特性のみを比較するのは危険と思われる。たとえばサブテーマ3（最適設計材料強靱化）の強靱鋼は強い方位依存性を有するため、荷重方向によっては低い靱性を示すことが想定できる。健全性を保つために必要な特性は他にも多くあり、これらを開発研究の初期段階から評価し、幅広く材料特性を捉えることが重要と思われる。

「⑬エネルギー関連構造材料の信頼性評価技術の研究開発」：

- ・研究開発の方向性、目標、計画、体制は妥当であり、特に問題はなく、ほぼ計画どおりの成果を得ており、そのなかには事前評価での評価委員の要望や指摘に応える内容も含まれている。
- ・実使用環境下での長時間クリープやギガサイクル疲労でのき裂進展、HIC（水素誘起割れ）などに関して貴重な新知見を獲得していることは特筆される。
- ・材料を安全に使うための規格化、標準化に大きく貢献している。特にクリープデータは、質量ともに世界最高で、世界的に高く評価されている。ギガサイクル疲労の分野でも、世界で最も多くの情報（論文）を発信している。
- ・サブテーマ1（クリープ機構）は日本機械学会規格の改定に連携し、その技術的根拠を与える研究成果となっており、産業界への寄与の点で高く評価できる。
- ・今後も実環境下での現象の把握と機構解明、および評価技術の確立に関して新知見を獲得し、学理を更に深化させ継続して世界をリードすることを期待したい。

「⑭低炭素化社会を実現する耐熱・耐環境材料の開発」：

- ・目標が明確であり、またサブテーマのミッションもクリアで、お互いが良く連携して世界をリードする成果を挙げている点は高く評価できる。
- ・プロジェクト全体としては、クリープ強度に飛躍のある耐熱合金の開発が進み、かつ耐酸化特性や低摩擦特性にも優れた世界トップレベルの材料が開発されつつある点は評価される。このような飛躍に対する学理の追求を今後は期待したい。
- ・新規な合金設計のアイデアや耐環境表面の作り込みのための独自性の高いプロセス技術は高く評価される。
- ・実施体制、マネジメントについても、推進会議を設定して進捗状況の確認と問題点の早期把握に努め、サブグループ間の研究連携を行い、ユニットセミナーで発表と議論を行って協力体制を強化する、そのなかで学会前にリハーサルセッションを設け若手に研鑽を積ませるなど、地道なシステムを作って実行している点も評価される。

「⑮軽量・高信頼性ハイブリッド材料の研究開発」：

- ・本プロジェクトで行っている「ツール技術」の開発は多くの研究開発者の役に立つものであり、特定の材料を目標にして特性の目標設定を行うよりも基礎・基盤研究としては意味がある。特に界面は重要な鍵を握っている。界面の振る舞いの学理構築・定量化を進め、界面の利用技術を提案することは価値がある。

- ・予算と研究者数は他プロジェクトに比して、多いとはいええない状況の中で、有名学術雑誌や内外の会議での発表、招待講演など、活発な活動を行い、ユニークなハイブリッド材料技術の基礎・基盤研究集団として国際的にも評価される成果を挙げている。
- ・環境負荷の少ない接着と剥離を容易に実現する可逆的接合技術など、斬新なアイデアに基づく新技術研究は興味深い。
- ・要素技術の積み上げが必要な段階にあり、現在の研究計画にあるような工学分野への寄与が短期間で達成される状況とは思えない。研究推進の時間尺度の見直しが必要ではないか。

「⑩先端超伝導材料に関する研究」：

- ・世界レベルの成果が挙げられている。特に基礎研究テーマでは優れた成果があり、優れた超伝導材料ができれば基礎と応用の両面でインパクトは大きいと期待される。
- ・若手も含めて各自のアイデアを生かした自由な研究環境をつくろうとしている点は良いと思う。ただし、独立に進めている印象があるので、各サブテーマ、各研究者間の連携がなされ相乗効果を上げる工夫がなされるとさらに成果が挙がるのではないか。
- ・試練の中で、頑張っているように思われるが、プロジェクト全体で、方向性やテーマ自体の見直しも、必要であれば、大胆にするべきか。
- ・サブテーマ4（「線材化プロセスと応用基盤」）は環境エネルギー問題の解決という観点からは中心となるテーマであり、その遅れは深刻である。早急な挺入れが必要であると考える。

「⑪ナノエレクトロニクスのための新材料・新機能の創製」：

- ・Hp（ハーフピッチ）22nm以降のナノデバイス要素技術というシリコン関連技術を中心とする研究開発の方向性・目的・目標の設定は妥当である。
- ・High-k材料や非晶質金属ゲートのテーマを始め、ナノエレクトロニクスにおける波及効果は大きいと思われる。
- ・金属被覆導電性ポリマーの発見とその3次元配線への応用という思いがけない進展も見られている。
- ・LSI開発におけるNIMSの材料分野の貢献はよくわかった。ただし製造ラインと直結していないので、フィードバックに時間がかかることが懸念される。
- ・日本から世界に発信し、ナノエレクトロニクスの進歩に貢献し、種々の製品として日本に戻ってくるという考え方は一つのグローバル貢献の見方としてあるが、知的財産戦略の抜けは、命取りになりかねない。

「⑫ワイドバンドギャップ光・電子材料の研究開発」：

- ・ワイドバンドギャップ光・電子材料に関する多くの研究サブテーマに取り組みサブテーマそれぞれで成果を挙げている。方向性や目的は適切である。
- ・多くの論文・特許があり、また光アイソレーターでは製品までの実用化が実現しており、大きな成果が得られている。特許では特に蛍光体関係が多い。
- ・事前評価結果でも指摘があったように、個々のサブテーマをいかに融合させていくかが依然として課題として残っている。

- ・ 個々の物質の課題を決めて議論しているという事であるが、より若手も根本的な議論に加えて将来の布石を打つことも必要である。「三人寄れば文殊の知恵」をもっと活かしてもよいと考える。
- ・ 公的研究機関として、幅広い研究とともに、高い成果が期待されるという点で、アプリケーションも見据えた研究に集中するか、個々の研究をより強くするかを迫りたい。

「⑱省エネ磁性材料の研究開発」：

- ・ 3年間で選択と集中を行うテーマがはっきりしており、明確な戦略のもとに遂行されている。
- ・ 各サブテーマで優れた研究成果が挙げられている。特に HDD（ハードディスクドライブ）用磁気記録媒体では実用化一歩手前まで到達しており高く評価される。
- ・ 分析力を武器に研究を進めるとことは、重要な視点である。ナノテクノロジーとしての質の高い研究を進めるためには、特に重要である。
- ・ 論文、特許等も多く、成果の発信も活発である。低消費電力の不揮発性記録素子やストレージ分野におけるアウトカム、インパクトも大きいことが期待される。
- ・ 企業との共同研究を通して最先端実用研究におけるニーズを知り、研究の方向にフィードバックをかけるという、よいサイクルができています。
- ・ 国内での実施企業が急減している状況で研究成果をどのように社会に還元するかは、研究者と共に機関が考えるべき問題であろう。

Ⅲ. 中間評価結果を受けての対応

プロジェクト責任者は、開示された中間評価報告書のコメントをその後の研究計画の見直し、研究内容のブラッシュアップなどに活用した。

中間評価結果を受けて、評価結果コメントは、プロジェクトの全体像が分かるように、プロジェクト責任者記入部分（研究目的と意義、研究内容、ミッションステートメント（具体的な達成目標）、平成23年度～平成25年度中間評価時までの主な研究成果（アウトプット）及び研究成果から生み出された（生み出される）効果・効用（アウトカム）、波及効果（インパクト）、中間評価時の進捗状況及び自己点検・評価）と一体化された。一体化された中間評価報告書は、理事長、研究担当理事、企画部門長兼戦略室長、企画部門評価室長に報告され、第三期中期計画研究プロジェクトの計画の見直しや研究推進に活用されるとともに、平成26年度から検討が開始された第四期中期計画（平成28年度～平成32年度）研究プロジェクトの立案においても参考にされた。

NIMS 公式ホームページの「[第三期中期計画プロジェクト評価報告書詳細](#)」には、19プロジェクトの一体化された中間評価報告書が掲載された。